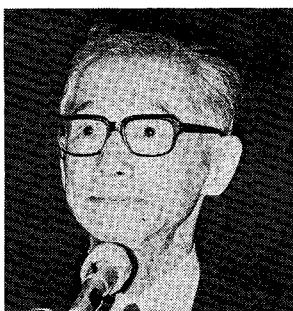


論説



最上 武雄*

● <第二次黒船>は防げるか ●

このたび土木学会長に推されたことは大変名誉なことと思っている。学校卒業後も母校を離れず、停年退職後も教育界に職を奉じているのだから、私の経歴は特殊なものである。口を開けば教育研究の話が出てくるのはあらかじめお許しを願わねばならぬ。数十年来世界は大きく変動している。日本も世界の波の中でもまれているのだが、鎖国の夢を覚まされてこのかた右往左往して今日に至っているわが国が、他の諸国と異なる問題を持っていたとしても不思議はない。黒船騒ぎで投げ込まれた西欧文化が固有の文化とはなはだ異なっていたので、先祖たちの驚きがいかに大きかったかは想像に余りある。文化の問題もさることながら、当時強大を誇った西洋諸国に呑み込まれぬために先祖たちが払った労苦は歴史が教えてくれている。

彼らは政治的独立が経済的国力と無関係でないことを見抜き、＜西洋の実学＞導入に力を致した。お雇い外国人に対し、当時の全予算に対してに高率の投資がなされたかは驚くほどだ。資源の乏しい日本では、外から原料を入れ、加工して輸出する道を採らねば国民の生活は守れず向上は図れないわけである。最近、質の高い独自の製品を開発して輸出にあてよとの声が、当然のように誰れ彼れからも聞かれる。ほんの少し前、私たちが知っている程度の過去においては事情が異なっていた。

研究的な仕事に従っていた先輩たちが研究の大切さ、技術の自主的開発の重要性を声を大にして説いてもそれこそ犬の遠吠えで大した反響はなかったのである。当時の為政者や企業家は研究を奨励し技術を自主的研究のうえに築き上げることは大切だとしながらも、一面それに不安を感じていたのであろう。欧米ですでに研究済みの完成された技術を輸入し、それによったほうがよほど確実でしかも安いと考えられていたらしい。先輩たちの世

の研究不尊重や安易主義に対する不満や憤りは良くわかるが、当時の日本の平均的学問レベル、国力などを考えると無理もなかったかも知れぬと思うのである。子供は親の庇護の下で自らは生産に従事しないが、将来に備えて体力づくりや知識の獲得をやっている。明治以来西欧的な技術を日本で育てようとするほぼ 100 年の歩みは、育児にも比せられよう。“西欧的”といったのは明治以前かなりの土木技術を持っていたからである。子供が大人たちから学び、大人たちを模倣することによって世に処する方法を身につけてゆくように、明治以後欧米に学び欧米を模倣しつつ西欧的な技術や研究が育てられていったのである。約 100 年の後、模倣・追従によって学んできた西欧の学問や技術も借り物らしくもなくなった。ごくわずかずつではあったが、与えられた研究費による数多くの研究を経て研究者の層も厚くなり、研究力も大きくなり伝統も築かれてきた。学問・技術以外の領域における世界の大きい変動に対しても、曲がりなりにもなんとか対応できるような国力も養われてきたと想像しても良さそうである。そして現在では、だれもが独創的な研究に基づく新しい技術を開拓せよと言う。当り前のことのようなだが世の中も変わったものだと思う。昔の先輩たちが生きていてこれを聞いたらなんと思うだろうか。

さて、長い間の模倣追従が習慣となり体質のごときものになっているかどうかの反省は不要であろうか。

6 世紀に先祖たちが、中国文化などで驚かされたのは＜第 0 次の黒船＞であったと思う。19 世紀の＜第一次黒船＞までの長い間にこの文化をこなして固有のものとしたのであるが、＜第一次黒船＞はまた異質の文化をもたらして、当時の先祖たちは眠りを覚まされた。現在までに先輩たちの血のにじむような労苦によって西欧的なものをほぼわが血肉にできたとするならば、真の独創を発揮すべきは今ではないだろうか。この期に及んでうっかりしていると＜第二次の黒船＞を経験させられないと言いつて切れない。針の穴から天井をのぞいている者の懸念が杞憂に終われば幸いである。

* 正会員 工博 土木学会第 63 代会長、日本大学教授、理工学部土木工学科